報告番号	香大医博甲　第747号

様式１０２

学位論文の内容の要旨

専　攻	医学	部　門 (平成27年度以前入学者のみ記入)	
学籍番号	17D706	氏　名	岡崎　智哉
論文題目	Targeted temperature management guided by the severity of hyperlactatemia for out-of-hospital cardiac arrest patients: a post hoc analysis of a nationwide, multicenter prospective registry		

（論文要旨）

①

【背景】

International Liaison Committee on Resuscitation guidelinesは心拍再開後の院外心停止患者に対して32度から36度の体温管理療法が推奨されている。しかし、個別の患者に対しての目標体温設定については触れられていない。近年では重症度によって温度を設定すべきと考えられているが明確なエビデンスがない。心拍再開後の患者において乳酸値と神経学的転帰の関連についてはこれまでに報告されているが、乳酸値に応じて目標体温を設定することで転帰の改善に至るかどうかはわかっていない。今研究の目的は様々な程度の高乳酸血症の院外心停止の患者において32-34度での管理と35-36度での管理を比較することである。

【方法】

the Japanese Association for Acute Medicine out-of-hospital cardiac arrest registryの2014年7月から2015年12月までのデータを解析した。自己心拍再開後に体温管理療法を受け、乳酸値が測定されている症例を組み入れた。組み入れられた患者を、自己心拍再開後の乳酸値に応じて7mmol/L, 12mmol/Lをカットオフ値として、軽度高乳酸血症群、中等度高乳酸血症群、重度高乳酸血症群に分類した。さらにそれぞれの高乳酸血症群において目標体温値をもとに32-34度群、35-36度群に分類した。1か月後の調整神経学的転帰良好率を主要評価項目とした。転帰良好はcerebral performance category score 1 または 2 と定義した（1, good cerebral recovery; 2, moderate cerebral disability; 3, severe cerebral disability; 4, coma or vegetative state; and 5, death/brain death)。

【結果】

組み入れ基準を満たした435人の患者のうち、軽度高乳酸血症群、中等度高乳酸血症群、重度高乳酸血症群にそれぞれ139人、132人、114人が振り分けられた。各郡において70-80%の患者において、目標体温は32-34度に設定されていた。重度高乳酸血症群において調整1か月後神経学的転帰良好率は32-34度群で優位に高かった(27.4% (95% confidence interval: 22.0–32.8%) vs. 12.4% (95% CI 3.5– 21.2%); p = 0.005)。一方で、軽度高乳酸血症群、中等度高乳酸血症群においては32-34度群と35-36度群での調整転帰良好率に有意な差を認めなかった。

【結語】

重度の高乳酸血症を伴う院外心停止患者に対して32-34度での体温管理は35-36度での体温管理と比較して、1か月後の調整神経学的転帰良好率が優位に高かった。さらなる今後の研究が必要である。

掲載誌名	Annals of Intensive Care 第 9 巻, 第 1 号		
(公表予定) 掲載年月	2019年 11月	出版社(等)名	Springer
Peer Review		(有) ・ 無	

(備考) 論文要旨は，日本語で1，５００字以内にまとめてください。